

念願のタイトル

24年ぶりに「九州」の頂点に

粘り強く3打差を逆転

《九州ミッドアマチュア選手権》

通算イーブンパー 144

今村 大志郎（麻生飯塚、44歳）



ゴルフの鉄則を貫いた先に栄冠が待っていた。「自分のプレーに徹する」。ゴルフではよく使われる言葉ではあるが、今村がまさにそれを実行し、1999年の九州産業大3年時に勝った九州学生選手権以来の「九州」の冠のつく2部門目のタイトルを手にした。

「念願でした。めっちゃ嬉しい。若い人が強いし、チャンスはないかな、と。でも、今日

はティーショットが良かったし戦えるかな、とは思っていた。とにかく（石塚に）大きく離されずについていこう、と。彼とはゴルフも飛距離も違うし、相手を見ずに自分のゴルフに徹することだけを考えて」

石塚は27歳。44歳の今村とは17歳も年下。平均飛距離250ヤードの今村に対して石塚は300ヤードを超える。石塚は最終日の8番ミドル（437ヤード）でティーショットを330ヤード近く飛ばし、残り110ヤードをピン左1m弱につけてバーディーを奪うなどアウトの7、8、9番で3連続バーディー。この時点で今村との差は「3」。今村は第1打でフェアウエーを確実にキープして、切れるアイアンで測ったようにピン1～1.5mに絡むショットでアウトを4バーディー（2ボギー）といいゴルフを展開していたが、石塚には追いつけない。スタート前の2打差は逆に広がった。

潮目が変わったのは10番ロング。第1打をクロスバンカーに入れた石塚の3Iでの第2打がバンカーの土手に当たるなどして、このホールをダブルボギーとした。2人が通算1オーバーで並んで迎えた17番ミドルで今村が上り4mのバーディーを沈めて一歩リードすると、続く18番ロングで石塚が第1打を右にOBして決着がついた。

潮目と言えば、今村は昨年の九州ミッドアマ福岡北部予選で1打足りずに決勝大会の出場を逃した。日本ミッドアマに5年連続出場の経験を持つ今村には屈辱であった。「今まで一番悔しい思いをした。あれから練習方法を変えた。それまではずっと球を打っていたけど、元々、腰も悪かったし、朝と夜のストレッチなど体幹を鍛えるようにした」。その効果は試合に表れる。昨年11月の全九州クラチャンの一般男子社会人の部を制し、今年は7月の日刊アマでも優勝した。「流れはある」と気持ち的に余裕を持って臨んだ今大会だった。



さらに、今村の強い「味方」となったのが6月に麻生飯塚GC（福岡県飯塚市）で開催される日本男子プロツアーの「ASO飯塚チャレンジトーナメント」だ。「私が所属しているということもあって、ここ2年ほど試合に出させてもらってますが、とにかくラフが深い。ラフにつかまるとプロでも出すのが難しい。ラフに入れない正確なショットが求められる」。この体験が今大会に生かされた。今村がティーショットでフェアウエーを外したのは初日が3度で最終日が1度だけ。ラフと言ってもセカンドでグリーンが狙えないほど苦しんだことはなかった。

穂波西中2年から両親の影響でゴルフを始め、30歳から本格的に競技ゴルフにのめり込んだ。現在は飯塚市で主に解体工事を手掛ける「㈱フクハン」の社長をしながらプレーを続ける。「ジャパンですか？ シードを取るためにトップ10くらいには入りたいですね」。地元・福岡の芥屋GCで開催される全国大会でも周りに影響されずに、自分のゴルフに徹する。

《佐賀ロイヤルGC》

